

フィリピンでの幸福

富田 江里子

助産婦(フィリピン在住)

朝の家事を済ませ、2歳と4歳の子供を連れて、でこぼこでドロドロの坂道を傘をさしながら歩いて下る。熱帯の日差しは容赦せずに照るので、雨傘が役に立つ。勤務先の St. バルナバマタニティークリニックまで歩いて5分。着いてみると、いろいろな大きさのグアバがいくつか置いてあった。「一昨日お産をした人の家族が、持ってきてくれたの」と、私の相棒のティナが言う。おいしそうなグアバ。申し訳ないような、それでいて幸せな気分させてもらえる。幸せは、みんなで分け合うのがここでのやり方。来ていた患者も近所の子供たちも、グアバにかじりついた。まだ青いグアバは種が多く固い。でも、馴れるとこれが美味しくなる。お腹にも幸せが入った。さあ、はじめよう。こんなふうに、私の1日はスタートする。

St. バルナバマタニティークリニック

夫の仕事(IGKS 緑化協力という NPO)の都合で、私たち家族はフィリピンのマンガハン再定住地という所で暮らしている。ここは10年前のピナトゥボ火山噴火で全てを失った人々に開かれた地域で、今も貧しい人々が暮らしている。水道はないけれど、井戸はある(だが乾期には涸れることもある)。電気はあるが、停電はしょっちゅう。電話はない。

いろいろな経緯があり、私は昨年(2012)の12月から、ここで妊産婦のための個人クリニック「St. バルナバマタニティークリニック」を始めた(母校の聖バルナバ助産婦学院の名前を勝手にもらってつけました)。クリニックというと聞こえはいいが、竹

と藁でできた小屋に竹製のベッドが1つ。トラウベと血圧計、体重計があるだけである。

クリニックでの活動

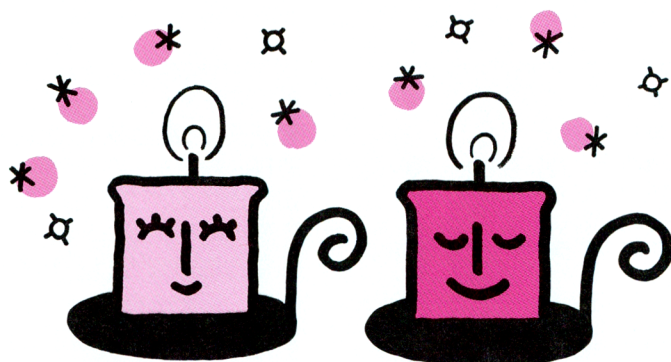
何もないからこそ、基本は「自然であること」。お産にも病気の人にも共通している、ここでのやり方だ。内診はしないから、陣痛の来ている人には付き添う。

産婦は自由な体位で過ごす。第1期は立位か座位で経過する人が多い。

この辺りの人は近代医学の影響が、お産はベッドに仰向けと思い込んでしまっている。しかし、出産体位で一番多いのは、今のところ側臥位。ドップラーも酸素も抗生物質もないので、仮死や会陰裂傷の可能性のある仰臥位で横になる産婦に、私が側臥位になろうと働きかけるからだ。ありがたいことに、側臥位のお産ではほとんど裂傷は起きない(フィリピン人だからだろうか?)。症例は少ないが、立位や座位でも全て無傷。「おもしろいなー」と思っている。

アプガースコアが悪くない限り、吸引もしない。赤ちゃんは生まれるとすぐにお母さんのお腹の上へ。そこで羊水を拭いたり、臍帯を結紮したりする。二、三声「ふぎやあー」と産声をあげるが、多くはすぐに泣きやむ。目を開けてキョロキョロしたり、手をのばしたり。このような赤ちゃんの姿を目にすると、お産に立ち合えて幸せだと心から思う。

人工破膜もしない。被膜児で生まれる子は、幸運だと信じられているからだ。どこまで卵膜を被



っていたかにより、強運度がわかるらしい。この卵膜は干して取っておき、お守りにする。

文化の違う外国人である私にも、プライベートな部分のお産を手伝わせてくれる、彼女たちに感謝。お産の幸せパワーで、私まで幸せを感じることができる。

クリニックには病気の人もある。貧しくて病院に行けなかったり、薬が買えない人たちだ。私が医師ではないことも承知している。私がやっていることは、食事を自然なものだけにしよう説明したり、生姜やにんにく、酢、いろいろな薬草を使った手当て等だ。抗生物質や薬があればと思うことは多いが、高価すぎて買えないので仕方がない。手に入れられるもので、ゆっくりと自然治癒力を助けていくしかない。医師ではないからこそ話を聞き、いろんな所に触れてみる。つぼをマッサージしたり温めたり、タイガーバームを塗ったりと、誰でもできる手当てをする。一時的にせよ効果があるらしく、喜んでくれる人が多い。患者の顔が少しでも明るくなると、私もまた幸せをもらった気分になる。

いろいろな人に、そして神様に感謝

青年海外協力隊での活動も含め、途上国での助産婦臨床経験年数が、日本での半分を越えた。デング熱やマラリア、アメーバー赤痢等々と、途上国特有の病気はここで学んだが、1人でクリニックをやっていく基礎は、日本での臨床経験だ。甚だ未熟な私に、諸先輩方は根気よく指導して下さい

った。多くの妊産婦さんからいろいろなことを学んだ。そして今、クリニックを訪れる一人ひとりの患者さんが、やはり私を育ててくれている。感謝の気持ちでいっぱいだ。

このクリニックは全てボランティアで運営されている。そして日本のいろいろな人が様々な形で私を支援してくれている。例えば、薬やガーゼをいただく。これは、そのまま必要な患者に使われる。シーツ、タオル、子供服等々を送って下さる人もいる。フィリピンまで届けば、ここでそれらを売って、薬購入の資金にあてることができる。私ではわからない病気の患者さんについて電話で相談にのって下さる人、調べてアドバイスを下さる人もいる。現地まで手伝いに来て下さり、大人や子供にストレッチ体操を教えてくれた人、貧しくて学校に行けないこの辺りの子供たちのために、楽しいプログラムを用意してくれた人たちもいた。

基本的に、クリニックは患者が来れば来るほど赤字になるシステムなので、やっていけなくなりそうなのだが、何とかなっている。それも、いろいろな方々のご支援をいただいているからだ。こういう出会いも、神様のお恵みののだと思う。

忙しさにかまけて、私がクリニックでもらう幸せを、日本の人々に伝えられていない。これが当面の課題だ。私を育ててくれた母校の名前を勝手にもらったこのクリニック。ここに関わって下さっている多くの方々に、心から感謝申し上げます。

次は上條智恵さんにバトンを渡します。